ロマン派の世界観における動物

リカルダ・フーフ　著
梅内　幸信　訳・注

現代作家であれば、その目に動物の眼差しを帯びた人間が与える魅力について一度は語るものだ。そもそも、そういった魅力に敏感な者は、動物そのものに対してそれを最も強く感じることであろう。我々人間の魂が言葉や芸術の形で外部へと放射してきたものはすべて、動物の目にあっては未だ解き放たれぬままにある。動物の眼差しは、ちょうど音楽のごとく直接魂に触れる。無意識の愛好家であるロマン派の人々は、動物界の魔力にことのほか敏感であらざるをえなかった。それというのも、その世界においてこそ無意識の理念は、その賛嘆に値する謎めいた力をこの上もなく顕著に発揮するからである。

反ロマン主義的見解の持ち主の中でも、とりわけ、人間をつまらぬ、ないしは軽蔑すべき肉体に縛りつけられた精神と見なしている人々は、動物に対して思いやりや理解を抱かぬものである。素朴な古代人は、動物を神的なものとして崇めたり、神々の中に列したり、さらには、人間と親しく共同生活を営ませたりし、パドヴァのアントニウス[1]やアッシジのフランチェスコ[2]といった中世の夢想的な聖人たちは、動物たちに説教し、それらを兄弟と呼んだ。これに反して、デカルト[3]が動物を機械と見なすことができると主張したことによって、近世の哲学は人間と動物の間に測りがたい溝を作ってし

まった。カントやフィヒテ[4]もまた、道徳の世界ばかりを念頭に置いて、動物界の謎を見過ごしてしまったのである。ロマン派の先駆者と呼んで差し支えのないラーヴァーター[5]とヘルダー[6]は、動物に対して心のこもった考えを示したのであった。しかし、シェリング[7]が初めて――その自然哲学が、動物愛好家シャイトリーン[8]の表現に従えば、「フィヒテによって葬られた外界を再び墓穴から呼び出し、これにはつらつとした生命を与えた」ことによって――、その溝を埋め、それがために人間は嬉々として、再び現れた自然に向かって、いそいそと進んで行ったのである。自然を発生学的に解釈することによって、動物は人間と極めて親密に関連づけられたのであった。両者とも、母なる大地の子どもとして描かれた。つまり、動物はより早く生まれた完全でない子どもであり、人間は後に生まれた、より完全な子どもなのである。ヘルダーも、動物を人間の年上の兄弟と呼んでいた。

E・T・A・ホフマン[10]が動物と人間を互いに関連づけたその方法から、一種の同一性哲学が構築されうるであろう。ホフマンにとっては、彼自身が言っているように、日常生活における人物たちが、彼の「内的で、夢想的な霊界」の中で姿を現すのであった。そしてそこで、可愛い娘は暗青色の目をした小さな金緑色の蛇[11]となり、ティンテ先生[12]はブンブン音を立てて飛ぶ、けがらわしい蝿となるのである。夢想家で、かつユーモアのあるホフマンにとって、意識の境界上にあり、いともたやすく人間界の無意識的なイロニー化と見なされる動物界は、芸術的な理由で好ましいものである。しかし、ロマン派に属する人間であるだけに、感情がホフマンを、夢中遊行する神秘的な人々へと摩訶不思議にも誘う。そういった人々は、当時好んで夢遊病患者と比較されたのである。

ホフマンは、動物を個別に十分観察していたにもかかわらず、それらをあるがままに描かず、擬人化し戯画化したのであった。というのも、彼にとって主たる関心事は、動物を人間と関連づけ、いわば人間の蔽い隠された衝動、その過去、人間の天性のうちに潜む秘密を、動物の姿で擬人化することであった。この関係において、ホフマンがその敬愛した画家

ジャック・カロー[13]について言及していることは、彼自身についても当てはまるのである。「人間的なものを動物と衝突させ、哀れな行状の人間を嘲笑するイロニーというやつは、精神の奥深くにしか住めないのだよ。それで、動物と人間から創り出されたカローのグロテスクな人物たちは、奥まで見通す真剣な観察者たちには、おどけのベールの下に隠されたあらゆる秘密をそれとなく教えるのさ。」

この流儀が、啓蒙主義の時代にも好まれていた、人間と動物との啓発的な比較となんのかかわりもないことは自明のことである。ここで問題となっているものは比較ではなく、類縁関係にある生き物たちの溢れんばかりの混在なのであり、これによって調和は一層豊かに、すなわち生き物全体の比喩は一層明確になるのである。

オーケン[14]は、動物界を分解された人間と定義づけた。動物を振り返って見ると、人間は、己の霊がその間に成長はしたものの、しかし、生来の性質を捨てずにきた、いわばその発展段階を目撃するのである。動物もまた霊をもつという洞察は、動物に関する科学的描写の形としては、まず、本来の動物心理学を輪郭づけた最初の学者であるオーケンにおいて見られる。オーケンも、また、彼に続くカールス[15]も、動物霊と人間霊の違いを次の点、すなわち「動物霊は、意識の頂点までは発達せず、それゆえ自らを客体とするには至らない」ところに見ていた。その結果、カールスの言うごとく、「人は、動物を恐らく個体とは呼びえようが、しかし、個人とは呼びえない」のである。しかし、まさにこの理由で、動物の霊は、我々の目には全く偽りのないものとして、方向性の明確なものとして見えてくるのである。オーケンは、動物性を大まかに、次のように描いて見せる。水中に棲む細菌は、感覚の代わりに触角をもっているが、その器官とは内臓なのである。彼は、細菌の精神生活を「動物磁気による状態」と呼んでいるが、これによって細菌は目がなくとも養分を見つけられるのである。次の段階である生殖動物には、三つのシステムが存在する。つまり、生殖器官と消化器官、味覚器官であるが、これらにそれぞれ特有の精神生活が対応している。すなわち、慎重と貪欲、快楽である。動物磁気による知覚を引き受け

るのは、とりわけ予感能力の部所、肝臓である。「蝸牛（かたつむり）を見たまえ。そうすれば、三脚の上に鎮座まします予感の女神の姿が見えるがごとく思われる。這う一匹の蝸牛になんという荘厳さが、なんという真剣さが、なんという思慮が、なんという畏怖が、そして同時に、なんという信頼がこめられていることか！　まさしく、蝸牛は内界の奥深くでまどろむ精神の崇高な象徴なのだ。」こうして、昆虫の形で最初に、その理念が芸術衝動となって現れる動物が登場する。最初の体節動物もまた巧みな体節を有し、「芸術衝動と体節の能力は、平行して働く」。呼吸器官と運動器官は、昆虫の本質的器官である。昆虫は、肺臓動物なのである。しかし、胸には「健康と生命力、気高さ、寛容、剛勇」が宿っている。オーケンは、昆虫を地上で最も勇敢で強い動物と呼んでいるが、しかし、同時にまた、最も狡猾で腹黒い動物の一つとも呼んでいる。「つまり、狡猾さは、いわば胸に対応して発達した嗅覚の精神的側面なのである。」芸術衝動は、これに続く、体節の巧みさをもたない魚や両生類にあっては消えてしまう。にもかかわらず、魚と両生類において初めて、頭と胴体との間の対立が現れ、これによって――自意識ではないにせよ――意識と記憶の生ずる可能性がでてくるのである。魚の頭は最も下等なものであり、そもそも魚は、本質的には腹部動物である。すなわち、真剣で、予感に満ち、貪欲である。こうなると徐々に、感覚全体が出来てくる。オーケンは、魚を舌部動物と呼んだのであるから、両生類を鼻部動物と見なしたことになろう。両生類は、昆虫と同様、胸部動物である。しかし、両生類の狡猾さは、これが高ずると、待ち伏せ、襲撃、毒殺となり、その勇気は厚顔無恥となる。「両生類は、腹をすかした英雄に過ぎない。」より高い段階における昆虫の反復形態である鳥にあっては、「肺臓精神と体節精神」が支配するので、芸術衝動が再び現れてくる。このことと平行して鳥は、耳部動物であって、聞くことも話すこともできる。すなわち、鳥にとっては、重要であるものの、人には存在しないと見える標（しるし）が存在する。鳥は、さえずりで極めて多くの感情を表現する。こう考えると、鳥は様々なイメージをもっていることになる。そこで、鳥は夢見ると主張する人もいる。このような広範に亙る区別に加えて、哺乳類は「目の霊」と、そ

れによって生ずるある種の認識と理解を持ち込んだ。しかしながら、人間において初めて、動物のもつあらゆる働きが統一されて、自意識となるのである。

このように動物の姿は、もはや個々の特徴からモザイク状に組み立てられるのではなく、我々はそれを生きて完結したものとして、すなわち発達能力をもつ霊として理解することを学ぶのである。どこまで発達が可能かについては、様々な意見があった。オーケンとカールスは、すでに私が述べたように、動物は意識ないし精神の領域から永遠に締め出されていると考えたのである。

カールスが一八六六年に『比較心理学、別称動物界の序列における霊の歴史』を公表したとき、ドイツの精神生活における状況は、ロマン派と自然哲学にとって非常に不都合な事態になってしまっていた。いわゆるダーウィンの生物進化論[16]が支配的となり、このため動物に対する態度表明が、以前考えもしなかった意味で重要になってきたからである。それというのも、進化論者や唯物論者の中でも根っからの扇動家たちは、人間を動物から派生させ、それによって人間を動物の段階に貶(おとし)め、人間の精神的にして神的な生命、すなわち永遠の生命を否認しようとしたからである。「種、とりわけより高等な動物の種は不変であり、進化思想は決して、一つの種が実際上生存競争によって生ずるか、あるいは言われるがごとく、別の種から生ずるとは理解されない」というのが、ロマン派および自然哲学の一層古い見解である。その擁護者としてカールスは、自分の動物心理学において論争を挑み、絶えずこう強調したのである。「確かに、動物霊は、人間の霊と同一の根源から生じており、従って、下等な動物霊は人間の無意識的胎児霊に譬えられ、高等な動物霊は無意識的乳児霊、詰まるところ、目覚めつつある自己意識を具えた幼児霊に譬えられる。しかし、動物霊は決して〈翼をもつ魂〉という段階には到達せず、またその限りにおいて、かの類推にもかかわらず、やはり人間霊とは本質的に異なるものと見なされねばならない」と。

動物に対する思いやりにもかかわらず、また、動物の中で働いている無意識に対する畏怖にもかかわらず、カールスは、気高くも人間と動物との間の距離を指摘する。動物は、属としてのみ不死に与っているに過ぎず、いわばこの種属は、絶えず新たな形姿によって変身を重ねて、それ自体の諸々の部分から成長を遂げてゆく一個の巨大動物のごときものであるが、これに反し、人類においては、個人そのものが種属の永遠性に関与しうるのである。

一歩一歩考えを進める慎重な思想家であるパサヴァン[17]は、カールスと同様、動物の不死性を否認するに至った。にもかかわらず、特徴的なことは、動物界とその苦しみという謎がパサヴァンの関心を大いに引いたにもかかわらず、彼は動物界を人類の一準備段階として説明しただけで、その謎を解明する努力を敢えて全くしなかったことである。しかしながら、その他のロマン派の人々は、動物との極めて内的な類縁性を前提とし、本質的な相違を認めたくないという彼らの内的感情に、しばしば固執することとなった。一人の人間において意識的精神の進化が小さければ小さいほど、また、無意識的万有との関連がより強く感じられ、熱望されればされるほど、その人間にとっては、暗い衝動に突き動かされる夢遊病者たちとの区別が益々消えてしまうこととなったのである。クリスティアン・ブレンターノ[18]は、我々が「その現在の現象形態に惑わされて」、動物をはるかに低く貶めたと考えていた。このことは、もしローマの動物が、実際に、よその動物よりもはるかに利口であるとすれば――ブレンターノは、そういう観察を得たと主張し、それを法王の影響のせいにしたのであるが――、事実、本当のことであるに違いない。自然への親近性を抱くベッティーナ[19]の書簡と日記は、詩的魔力と神秘的な智恵で満たされている。彼女の小夜啼鳥（さよなきどり）との出会い、板張りの小屋の中にいるノロ鹿との出会いを思い出してみるがよい。ノロ鹿は、深淵から霊が見詰めるその目で彼女を眺め、まるで救済を求めるかのように、彼女をじっと見詰めて叫び声を上げる。小夜啼鳥も、飛び跳ねて益々彼女に近づき、まるでベッティーナと交感したいかのように、彼女の瞳に見入る。そのとき彼女は、感情は思想の萌芽であるという所見を述べる。「そうであるとすれば、ここで自然が、私たち

をしてその仕事場へ、なんと深く強烈な視線を向けさせることでしょうか、自然はどれほどの上昇を準備していることでしょうか、自然は、その萌芽をなんと奥深い所に置いていることでしょうか！　小夜啼鳥と恋人たちの意識との間には――恋人たちは、自分たちの情熱が小夜啼鳥の歌となって聞こえるほどまでに高められ、小夜啼鳥の旋律が自分たちの感情の真実の表現だと感ずるのですが――、その間には、なおどれほどの隔たりがあることでしょうか！　――ああ、無駄なものは一切ないのです。自然は、一切をその弛まぬ活動のために必要とし、その活動はさらに進んで自然の救済となるはずでしょうし、また、そうならねばならないのです。」

かつて、ベッティーナが夜ライン河の畔に立って、その泡立つ波が、回らぬ舌で話す幼児のごとく岸辺にぴちぱちゃと押し寄せたとき、彼女は、夢見ごこちに、こう自問したのである。「ひょっとしたら、人間は自然を救済すべきなのかしら？」そして彼女は、自然が嘆きつつ彼女になにかを求めるかのような感情を幾度となく抱き、自然が願っていることを理解できずに、心が引き裂かれたことを思い出した。人間が自然を救済する任務を担っているというこの宗教的かつロマン主義的立場を代表していたのは、とりわけバーダー[20]であり、彼と共にその他多くの人々は、使徒パウロ[21]の、救済を熱望して、ため息をつく被造物に関する有名な言葉を、動物に関連づけたのであった。

我々は、自然に寄り添う二人の子どものような魂の持ち主であるユスティーヌス・ケルナー[22]とゴットヒルフ・シューベルト[23]において、あるときには動物に対する純粋に兄弟のごとき感情、また、あるときには救世主の憐憫と呼んでも良いものに出会うのである。シューベルトは、動物には不死の霊があると明言している。「しばしば、目には見えない秘密の世界が動物の目から輝き出る。あたかも、二つの世界を結ぶ門が開かれ、自問自答しつつ、その前にいる人間を少なくとも束の間観察するかのごとくに。そしてしばしば、いわれなく拷問にかけられたり、あるいは人間の手にかかって死んでゆく動物の目から、奥深い所にある自己意識の一時的な閃光が輝き出るかのごとくに思われる。この意識が、お前を思い出

させる証(あかし)となるであろう。この世を出て、あの世に入るまで。」ケルナーの巫女(みこ)は、動物の右目の中に小さな青白い炎を認めると、これを動物の不死の部分と見なすのであった。また、これと同じ意味においてケルナーは、感動的な詩の中で、初めて母親から離されて、むりやり屋外へと引かれて、屠殺される子牛の目から輝き出る眼差しに、こう言わせている。「私の中にも一つの霊が宿っている。私のためにも神様は、裁きの庭を開いてくれるのだ。」それどころかリングザイス[24]に至っては、ある学問的な著作の中で、動物の不死の可能性も否定しきれないという発言を行なったのである。

ロマン派の人々の中で動物の友として最も思いやりがあり、本当の情熱家であり、その宣伝によって動物保護連盟の創設を実現した人は、ダウマー[25]である。この心優しく、孤独な炎の思想家は、倦まず弛まず、増大する物質主義に対抗して、最近に至るまで精神のもつ諸権利を擁護してきたのであった。

ダウマーもまた、そのような問題が一九世紀の六〇年代に扱われたのと同じように、こう弁明しなければならないと信じたのである。「私は、人間と動物を同一の段階に据えることによって、敵対者を手助けしているように見えます。ただそう見えるだけなのです。というのも私は、人間を動物へと貶める代わりに、むしろ、動物を人間へと持ち上げようとしているのですから」と。カールスの慎重な観点を捨てて、ダウマーは、共に神を賞賛しようと魚や鳥に呼びかける聖人たちの、万物を愛する偉大な心を拠り所としたのである。彼には、自己の主張を証明するために、十分に信憑性があるとは言えない報告、たとえば、蠍(さそり)の自殺という伝説[26]といったものを信用する傾向があったと思われる。動物のもつ一種の「向日性」に基づいて――これは、植物にも少なからず具わっているが――とりわけ、旅人たちが報告している、「象の日の出への挨拶」に基づいてダウマーは、場合によっては、さらなる進化の能力をもつ宗教感情を仮定しうると信じたのである。彼の念頭にはあったが、しかし、ついぞ実際に書かれることのなかった『動物の書』と『カトリック教の自然科学』という二冊の書物においてダウマーは、いずれにしてもこれに関連する自分の考えを詳述したのかも知れない。カト

リック教会が、当然のことのように普遍教会と名のるためには、動物をも、それどころか、自然全体をも包括しなければならないというダウマーの所見は、極端なものに見えるかも知れない。にもかかわらず、結局のところそこには、救済を熱望して、ため息をつく被造物に関する使徒パウロの言葉によって表現されていないようなものはなに一つとしてないのである。

文芸、そして真の文芸は、すべてロマン主義的であるが、それは、昔より統一を成す、徹頭徹尾生きた世界を前提としてきたのである。そしてそれは、動物を、分別をもって語り、かつ行動し、それどころか優れた神秘的な力をも意のままにすることも珍しくないものとして、人間と神々の真っ只中に仲間入りさせたのである。にもかかわらず、そこには次のごときロマン主義に特有の調子が、明確に認められる。つまり、人間と動物を子どものように素朴に同一視することは全くありえず、むしろ、両者を区別する意識が常に存在しているのである。——

人間を恐れ憚るは動物なり。
なぜというに、動物とは別のものなれば、
人間というものは。

このように、ヘルダーリーン[27]は歌っている。——しかし、現前する区別を超えて、再び触れ合う可能性が予感され、熱望されているのである。

注

この翻訳の底本は、》Ricarda Huch: Die Romantik — Blütezeit, Ausbreitung und Verfall —. Rainer Wunderlich Verlag Hermann Leins, Tübingen 1951, S. 458–466, „Das Tier in der romantischen Weltanschauung“《である。

(1) パドヴァのアントニウス（Antonius von Padua, 1192–1231）。ポルトガルはリスボン生まれのフランシスコ派神学者・説教師。アッシジのフランチェスコは、彼を自分の教団の教義を教える最初の教師として任命した。一二三二年に列聖された。恋人たちや結婚の守護者、不妊や熱病、家畜の疫病を防ぎ、紛失物を取り戻してくれる援助者と見なされている。

(2) アッシジのフランチェスコ（Franciscus v. Assisi, 1181 od. 1182–1226）。イタリアはアッシジ生まれのフランシスコ派教団創立者。アッシジの裕福な家庭に生まれた。病気と回心の体験後、彼は、ライ病患者たちの面倒を見ながら、乞食の生活を送った。一二〇九年以降、協力者が現れる。貧困と懺悔の中で人類と教会に奉仕するという考えは、一二一〇年に、法王インノセント三世によって口頭で承認された。その後、教団は急速に増大した。

(3) デカルト（René Descartes, 1596–1650）。フランスはトゥレーヌ生まれの哲学者・数学者・自然科学者。スコラ的教育を受け、その後数学と自然学を研究した。直観と演繹による新たな科学方法を提唱した。「我思う、故に我あり」を最初の確実な知識とし、次に、「明晰判明知は真なり」の原理と「生得観念」とによって、精神と物体とを互いに独立の二実体とする二元論を創立した。自然界は、延長と運動から完全に機械的に説明され、思考を本性とする精神とは交渉がないとしたために、心身関係の説明が困難となった。主要な著書には、『方法序説』（Discours de la méthode, 1637）、『哲学原理』（Principia philosophiae, 1644）等がある。

(4) カント（Immanuel Kant, 1724–1804）。ドイツはケーニヒスベルク生まれの哲学者。啓蒙主義思潮を克服し、認識能力の批判を根本に据えた批判哲学を創立した近世哲学の祖。世界連盟に基づく平和を最高原理とし、人間の進歩を人間の義務とする倫理観、美を道徳的イデアのシンボルと見なす芸術観は、シラーやクライスト、ハイネ等に影響を与えた。主要な著書には、『純粋理性批判』（Kritik der reinen Vernunft, 1781）、『実践理性批判』（Kritik der praktischen Vernunft, 1788）、『判断力批判』（Kritik der Urteilskraft, 1790）等がある。

(5) フィヒテ（Johann Gottlieb Fichte, 1762–1814）。ドイツはラメラウ生まれの哲学者。イェーナ大学、エアランゲン大学、ベルリーン大学の教授を務めた。カント哲学から出発し、純粋主観的観念論によって、自我の独立を主張し、一切の外面世界は、自

我の創造物として存在するという「絶対的自我の哲学」を打ち立てた。ベルリーンでシュレーゲル兄弟、ティーク、シュライヤーマハー等と親交を結び、ロマン派の人々の文学観に大きな影響を与えた。シュレーゲル兄弟のロマン主義的イロニーやノヴァーリスの魔術的観念論は、フィヒテの絶対自我哲学の影響を受けたものである。代表的著書には、『全知識学の基礎』(Grundlage der gesamten Wissenschaften, 1794/95) がある。

(6) ラーヴァーター (Johann Kaspar Lavater, 1741–1801)。スイスはチューリヒ生まれのプロテスタント教神学者・哲学者・作家。ヘルダーやゲーテ、ハーマンらと親交があった。神学者として彼は、キリスト教信仰と聖書の啓示を理性的に弁明することを試みた。シュトゥルム・ウント・ドラングの時期における彼の影響力は、敬虔主義の立場と美学的立場との間における、教条主義に捕われない仲介者という点にあった。当時過大評価されていた観相学においては、身体の形態から人間の性格を推測できるという見解の代表者であった。主要な著書には、『観相学について』(Von der Physiognomik, 1772) がある。

(7) ヘルダー (Johann Gottfried Herder, 1744–1803)。ドイツはモールンゲン生まれの評論家。シュトゥルム・ウント・ドラングの時期において指導的地位にあった。神学・哲学・歴史学・文学等広範な分野に亙って強い影響を与えた。主要な著書には、『言語起源論』(Abhandlung über den Ursprung der Sprache, 1772)、『歌謡における諸民族の声』(Stimmen der Völker in Liedern, 1778–79)、『人類歴史哲学考』(Ideen zur Philosophie der Geschichte der Menschheit, 1784–91) 等がある。

(8) シェリング (Friedrich Wilhelm Joseph von Schelling, 1775–1854)。ドイツはヴュルテンブルク地方のレーオンベルク生まれの哲学者。ヘーゲルとF・ヘルダーリーンと共にテュービンゲンの神学校で学んだ。一七九八年、ゲーテに招かれて、イェーナ大学の教授となる。ここで、シュレーゲル兄弟、ティーク、ノヴァーリスといったロマン派の人々と親交を結ぶ。一八〇三年、カロリーネ・ミヒャエーリスと結婚。その後、ヴュルツブルク大学、エアランゲン大学、ミュンヒェン大学、ベルリーン大学の教授を務めた。フィヒテの哲学から出発し、自然哲学並びに芸術哲学の端緒にならって、絶対的観念論の体系を企図した。ここにおいて、精神と自然、主体と客体等の対立は絶対的なものにあっては区別されず、ただ絶対的なものの発展においてのみ対立したものに分けて説明される(「同一性哲学」)。この考えは、最終的には宗教哲学へと移行した。その目的は、神の認識をその作用から引き出そうとするものであった。ショーペンハウアー (Arthur Schopenhauer, 1788–1860) やベルグソン (Henri Bergson, 1859–1941) 等へ影響を与えた。主要な著書には、『自然哲学考』(Ideen zu einer Philosophie der Natur, 1797)、『超越論的観念論の体系』(System des transcendentalen Idealismus, 1800)、『人間的自由の本質』(Philosoph. Untersuchungen über das Wesen der menschl.

Freiheit, 1809）等がある。

(9) シャイトリーン（Peter Scheitlin, 1779–1848）。スイスのプロテスタント宗教学者にして教育者。イェーナとゲッティンゲンで宗教学を学んだ後、一八〇三年以降ケレンツェン（Kerenzen）で牧師を務めた。一八〇五年に彼は、ザンクト・ガレンの高等教育機関教授となった。ここで彼は、司牧者としても働き、市営孤児院の設立を提唱した。彼は、啓蒙的情熱の溢れる教育書、とりわけ『試論動物心理学大全』（Versuch einer vollständigen Tierseelenkunde. 2 Bde. Stuttgart 1840）によって、スイスのドイツ語圏でかなり多くの読者を獲得した。

(10) ホフマン（Ernst Theodor Wilhelm Hoffmann, 1776–1822）。ホフマンは、モーツァルト（Wolfgang Amadeus Mozart, 1756–1791）に私淑するあまり、WilhelmをAmadeusに替えた。本来は法律家であったが、作家・作曲家・素描家としても活躍した。代表作として、『黄金の壺』（Der goldne Topf, 1814）、『スキュデリー嬢』（Das Fräulein von Scuderi, 1819/20）、『悪魔の霊液』（Die Elixiere des Teufels, 1815–16）、『牡猫ムルの人生観』（Lebens-Ansichten des Katers Murr, 1819, 1821）、『ブランビラ王女』（Prinzessin Brambilla, 1821）等がある。

(11) 「暗青色の目をした小さな緑金色の蛇」。ホフマンの『黄金の壺』（Der goldne Topf, 1814）に登場する主人公アンゼルムスの憧れる女性ゼルペンティーナが、このように描写されている。

(12) ティンテ先生（der Magister Tinte）。ホフマンの童話『よその子』（Das fremde Kind, 1817）に登場する、子どもたちの悪魔的家庭教師。

(13) ジャック・カロー（Jacques Callot, 1592–1635）。フランスはナンシー生まれの銅板画家。ローマとフィレンツェで修業した。戦争や都会における群像と個別人物像を巧みに描いた。主要な作品には、三〇年戦争の残酷さ描いた『戦争の悲惨』（Misères de la guerre, 1633/35）がある。

(14) オーケン（Lorenz Oken [Ockenfuß], 1779–1851）。ドイツはオッフェンブルク生まれの自然科学者・哲学者。イェーナ大学、ミュンヒェン大学、チューリヒ大学教授を務めた。百科全書派的雑誌である「イシス」の（1817–43）の創始者にして、編集者であった。オーケンは、自然哲学の主要な課題は、世界の発達要因を、区別された序列の形で体系的に説明することにあると考えた。主要な著書には、『感覚組織の延長としての宇宙について』（Über das Universum als Fortsetzung des Sinnensystems, 1808）、『自然哲学体系の手引き』（Lehrbuch des Systems der Naturphilosophie, 1809–11）等がある。

(15) カールス（Carl Gustav Carus, 1789–1869）。ドイツはライプツィヒ生まれの医学者・自然科学者・画家・哲学者。一八一四年に、ドレースデン大学医学部教授となる。包括的な宇宙論的自然哲学の信奉者。心理の分野における無意識理論と観相学に対する先駆的著書を遺している。主要な著書には、『心理学講義』（Vorlesungen über Psychologie, 1831）、『魂――霊の進化史のために――』（Psyche. Zur Entwicklungsgeschichte der Seele, 1846）等がある。

(16) 「ダーウィンの生物進化論」、ダーウィン（Charles Robert Darwin, 1809–1882）。イギリスはシュルーズベリー生まれの博物学者。一八三一年から三六年にかけて、「ビーグル号」に乗って南半球の島々における動植物や地質を調査した。その結果に基づいて彼は、「自然淘汰説」を提唱し、生物の進化を説明した。いわゆる「生物進化論」と呼ばれる彼の理論は、社会思想にも大きな影響を及ぼした。主要な著書には、『ビーグル号航海記』（Voyage of a naturalist round the world, 1845）、『種の起源』（On the origin of species by means of natural selection, 1859）等がある。

(17) パサヴァン（Johann David Passavant, 1787–1861）。ドイツはフランクフルト・アム・マイン生まれの芸術史家・画家。最初は商人であったが、後に画家となった。一八四〇年以降、フランクフルトのシュテーデル研究所視学官を務める。主要な著書には、『ウルビーノのラファエルとその父G・サンティ』（Raffael von Urbino und sein Vater G. Santi, 1839–58）、『イギリス、ベルギー芸術旅行』（Kunstreise durch England und Belgien, 1833）等がある。

(18) クリスティアン・ブレンターノ（Christian Brentano, 1784–1851）。ドイツはフランクフルト・アム・マイン生まれの作家。クレーメンスの弟。マールブルク大学とイェーナ大学で医学を学んだ。彼は、多才で落ち着きのない人物で、数学と医学と哲学の研究を、なんら実質的な成果を上げないままに行なっていたと言われる。主要な作品には、影絵芝居の脚本『不幸なフランス人、別称ドイツの自由の昇天祭』（Der unglückliche Franzose oder Der deutschen Freiheit Himmelfahrt, 1816）がある。

クレーメンス・ブレンターノ（Clemens Maria Brentano, 1778–1842）。ドイツはエーレンブライトシュタイン生まれのロマン派の詩人。主要な作品には、アルニムと協力して編集した童話集『少年の魔法の角笛』（Des Knaben Wunderhorn, 1806–08）、『けなげなカスパールと美しいアンナールの物語』（Geschichte vom braven Kasperl und schönen Annerl, 1817）、『ゴッケル物語』（Gockel, Hinkel und Gackeleia, 1938）等がある。妹のベッティーナは、アルニムと結婚した。

(19) ベッティーナ（Bettina von Arnim, Brentano, 1785–1859）。ドイツはフランクフルト・アム・マイン生まれの詩人。アルニムの妻、クレーメンス・ブレンターノの妹、ゾフィー・ラ・ロッシュの孫。F・H・ヤコービ（Friedrich Heinrich Jacobi, 1743–1819）、

ティーク、シュライヤーマハー、グリム兄弟といったロマン派の人々と親交があった。ゲーテを崇拝し、ゲーテと頻繁に文通を交わした。主要な著書には、『ある子どものゲーテとの往復書簡』(Goethe's Briefwechsel mit einem Kinde, 1835) がある。

(20) バーダー (Franz Xaver von Baader, 1765–1841)。ドイツはミュンヒェン生まれのカトリックの神学者・哲学者。ミュンヒェン大学の教授を務めた。ベーメの影響を受けた彼の哲学において、人間における神の自己展開は、闇の深淵からの自己解放として把握される。この思想は、シュレーゲル兄弟やシェリングを初めとするドイツ・ロマン派の人々に大きな影響を与えた。

(21) パウロ (Paulus, um 10 n. Chr. – um 60 ?)。原始キリスト教時代の大伝道者。キリキアのタルソス生まれのユダヤ人で、初めユダヤ教徒としてキリスト教の迫害者であったが、復活したキリストの声を聞いて回心し、以後ローマ世界への福音の伝道に努めた。ローマ皇帝ネロの迫害により殉教した。

(22) ユスティーヌス・ケルナー (Justinus Kerner, 1786–1862)。ドイツはルートヴィヒスブルク生まれの詩人。一八一九年以降、公立病院医長としてケルナーは、ヴァインスベルクに住み、ある女性夢遊病患者を診察した。シュヴァーベン地方のロマン派における重要な抒情詩人の一人である。主要な作品には、『旅影』(Die Reiseschatten, 1811)、『プレーフォルストの女視霊者』(Die Seherin von Prevorst, 1829) 等がある。

(23) ゴットヒルフ・シューベルト (Gotthilf Heinrich von Schubert, 1780–1860)。ドイツはホーエンシュタイン生まれの自然科学者・哲学者。エアランゲン大学、ミュンヒェン大学の教授を務めた。世界全体の有機的な法則性を前提とする自然哲学及び歴史哲学を発展させた。その思想は、ドイツ・ロマン派に大きな影響を与えた。代表的著書には、『自然科学の夜の側面についての見解』(Ansichten von der Nachtseite der Naturwissenschaft, 1808) がある。

(24) リングザイス (Johann Nepomuk von Ringseis, 1785–1880)。ドイツはオーバープファルツ地方のシュヴァルツホーフェン生まれの医師。ルートヴィヒ一世の侍医で、ミュンヒェン大学教授も務めた。彼は、ロマン主義的意味において医学を超越的なのもと結び付け、病気の根源は罪の中にありとした。主要な著書には、『医学の体系』(System der Medizin, 1841) がある。

(25) ダウマー (Georg Friedrich Daumer, 1800–1875)。ドイツはニュルンベルク生まれの宗教哲学者・詩人。ニュルンベルクのギムナージウム教授を務めた。東洋の形態芸術に規定された詩や物語を書いた。主要な作品には、『キリスト教古代の秘密』(Die Geheimnisse des christl. Altertums, 1847)、『新時代の宗教』(Die Religion des neuen Weltalters, 1850) 等がある。

(26) 「蠍の自殺という伝説」。蠍は、もはや逃れる術がないと知ると、自ら首を刺して自殺するという伝説がある。ここから、蠍は、

「自殺」の象徴でもあった。

(27) ヘルダーリーン（Friedrich Hölderlin, 1770–1843）。ドイツはシュヴァーベン地方ラウフェン生まれの詩人。テュービンゲンの神学校では、ヘーゲルとシェリングの同級生であった。フランクフルトの銀行家の家庭教師を務めていたとき、その夫人であるズゼッテに出会って、「ディオティーマ体験」と呼ばれるプラトニックな愛を体験する。この愛の体験によって彼は、独自の詩的境地を拓く。しかし、三七歳で発狂してから七三歳で死ぬまで、狂人として悲惨な日々を送った。主要な著書には、『ヒュペーリオン』（Hyperion, 1797）、『エムペドクレース』（Empedokles, 1798–99）等がある。

〔なお、この翻訳は、鹿児島地区ゲルマニストの有志によって一九八一年より始められた読書会の成果でもあることを、ここに銘記しておく。〕